

400) 母が逝く道 00.02.05.

ふきすさぶ春の吹雪は 聖路加のチャペルを巻いて  
真っ白に染め上げられた 大地には鳩が寄り添う  
綿菓子<sup>かもく</sup>の寡黙な街を 行き来する人々の群れ  
病院の窓から見れば 人生は遙かなる旅  
  
降る雪は母の心を 白無垢<sup>しろむく きぬ</sup>の衣に包んで  
悲しげにチャペルの鐘は 朝焼けの空に響いた  
この道はもう戻れない 永遠の別れを告げて  
純白の雪降る道を 踏み締めて天国へ逝く  
  
気丈にも死を恐れずに 自らの最期<sup>さいご</sup>にあたり  
人生を締め括るよに いくつかの言葉残して  
ひたすらに家族を愛し いつの日も友に愛され  
神のもと母は召されて 亡骸<sup>なきがら</sup>は静に眠る  
  
溶けてゆく雪のごとくに 人生は儂<sup>はかな</sup>いものと  
いつの日か教えし母は 今はもう永久<sup>とわ</sup>に帰らず  
人生を真摯<sup>しんし</sup>に生きて 人情<sup>あつこた</sup>に篤く応えて  
清らかな母の御霊<sup>みたま</sup>は 今頃は何処<sup>いづこ</sup>にあらん

